

ストーリーの構成文化財一覧表

番号	ふりがな 文化財の名称 (※1)	指定等の 状況(※2)	ストーリーの中の位置づけ (※3)	文化財の所 在地(※4)
①	かんばらしゆく 蒲原宿	未指定 史跡	江戸品川宿から15番目の宿、富士川を越えて一息つく宿場。「鉤の手(かぎのて)」に曲がる狭い道、なまこ壁の民家が江戸の面影を残す。 歌川広重の浮世絵作品の傑作のひとつ「蒲原雪の夜」は、温暖なこの地を雪景色で描いた謎を残す。東海道中膝栗毛の弥次喜多は、大名行列の一行にまぎれこんで御馳走にありつく。	静岡市
②	きゅういずみや おやすみどころ 旧和泉屋(お休み処)	国登録 有形文化財	旅人が宿泊する旅籠で、安政の大地震を耐え抜いた建物である。お休み処として訪ねることができ、旅籠の面影を感じることができる。東海道中膝栗毛の弥次喜多は蒲原宿の木賃宿に宿泊している。	静岡市
③	しだけじゅうたくおもや 志田家住宅主屋	国登録 有形文化財	安政の大地震(1854)後に再建された商家。奥まで土間が通じ、これに沿って部屋が続く、典型的な町屋の造りをよく残す。味噌・醤油の醸造をしていた建物や道具類が江戸の暮らしぶりを伝える。	静岡市
④	ゆいしゆく 由比宿	未指定 史跡	16番目の宿、名勝薩埵峠の東にあって峠越を目指す宿場町。江戸の風情ある正雪紺屋の建物は、由比正雪(乱を起し江戸の太平の世を揺るがせた人物)の生家と伝えられる。 広重は「由井」と題して薩埵峠を描く。駿河湾と富士山を望む絶景は、江戸時代と変わらない風景である。	静岡市
⑤	しずおかしとうかいどうひろしげびじゅつかん 静岡市東海道広重美術館  しょぞう うきよえ 所蔵の浮世絵	未指定 美術工芸品	本陣跡である由比公園内にある静岡市東海道広重美術館は、浮世絵専門の美術館。薩埵峠の風景を描いた「東海道五十三次ノ内・由井薩埵嶺」をはじめ、広重の名作など約1400点を収蔵。江戸の浮世絵芸術を堪能することができ、版画刷り体験もできる。	静岡市
⑥	あいの しゆくにしくらさわ 間の宿 西倉沢	未指定 史跡	由比宿と興津宿の間にあり、薩埵峠の東側の登り口。ここからいよいよ険しい道に差し掛かる。薩埵峠エリアでは、富士山の眺めが最も素晴らしい場所で立ち寄る人も多く、茶屋が繁盛した。街道に沿った町並みが立場の雰囲気を残す。	静岡市
⑦	とうかいどうなぬし やかた 東海道名主の館 こいけけじゅうたく (小池家住宅)	国登録 有形文化財	由比宿から薩埵峠へ向かう街道沿い、寺尾倉沢地区にある、江戸時代に村の「名主」だった小池家の住宅。明治時代の建物であるが、立派な大黒柱をもつ伝統的な民家で、地域の有力者らしい重厚な佇まいである。	静岡市

⑧	さったとうげ 薩埵峠	静岡市指定 名勝	由比宿と興津宿の間の海岸に突き出た山塊を超える峠。峠の地藏信仰の隆盛に伴い、仏教用語である「菩提薩埵」に由来して、中世には「薩埵峠」と呼ばれた。約3kmの峠越えの道は危険な断崖絶壁、振り返ることもできない狭い道であることから「親知らず子知らず」の難所といわれた。江戸時代中期に、朝鮮通信使の通行のために尾根を通る道が開かれた。	静岡市
⑨	せいけんじ 清見寺	国指定 史跡 名勝	興津宿の西側にあり、鎌倉・室町時代から勢力を誇った、東海道屈指の名刹。徳川家康が幼少時代に教育を受けた「手習いの間」が残るなど、数々のゆかりがある。交通の要衝にあり、朝鮮通信使の宿泊所にもなった。東海道中膝栗毛の弥次喜多は、清見関（きよみがせき）からの富士山を見ることができず、足どりも重たげに興津宿に向かう。	静岡市
⑩	みほのまつばら 三保松原	世界文化遺産 富士山 構成資産 国指定 名勝	松原から駿河湾越しの富士山を望む風景は、歌川広重の浮世絵のほか、日本の美術史上定着してきた構図であり、普遍的な美しさである。三保の松原はこのモチーフに欠かせない要素で、世界遺産「富士山—信仰の対象と芸術の源泉—」の構成資産として世界的にも知られる。	静岡市
⑪	えじりしゆくめいぶつ 江尻宿名物 おいわけようかん 追分羊羹	未指定 民俗 (生活文化)	追分羊羹は、江尻宿の西、東海道と清水湊への道の分岐点の「追分」と呼ばれる場所で、江戸時代から東海道の名物として売られていた。餡を竹皮で包み、竹皮ひもでむすび蒸しあげる昔ながらの味を守り続けている。元禄8年（1695年）創業の老舗追分羊羹本店が立つ場所には、「追分」の道しるべが残されている。	静岡市
⑫	ふちゅうしゆく 府中宿 すんぶきゅうじゅうろく (駿府九十六ヶ ちょう 町)	未指定 史跡	19番目の宿、駿府城の城下町でもあり、東海道中最大の宿場町。宿場の機能を整えたのは徳川家康である。東海道中膝栗毛では、伝馬町に宿をとった弥次喜多は、知人から借金し、安倍川町の遊郭に繰り出す。作者である、十返舎一九は府中宿生まれである。駿府城跡や浅間神社など、往時の繁栄を偲ばせる史跡が多く残されている。	静岡市
⑬	ふちゅうしゆくめいぶつ 府中宿名物 あべかわもち 安倍川餅	未指定 民俗 (生活文化)	餅に黄な粉をまぶしたもので、安倍川の東岸の茶屋で売られた街道名物。広重の浮世絵にも茶屋の風景が描かれる。徳川家康が安倍川餅と名付けたという説話もある。一つ五文だったことから、別名「五文どり」とも呼ばれ、東海道中膝栗毛にも登場している。	静岡市

⑭	まりこしゆくめいぶつ 丸子宿名物 じる とろろ汁	未指定 民俗 (生活文化)	丸子宿の名物として伝わるとろろ汁は、すり下ろした山芋を味噌汁で伸ばす点が特色である。東海道中膝栗毛の弥次・喜多は、夫婦喧嘩に巻き込まれ結局、食すことができなかった。	静岡市
⑮	ちょうじゃ 丁子屋	未指定 建造物	広重が描いた浮世絵「鞠子」の風景そのままの、茅葺の古民家。丸子宿名物のとろろ汁を味わうことができる。慶長元年(1596)と伝える老舗「丁子屋」は代表的なとろろ汁店である。	静岡市
⑯	けいりゅうじ 慶龍寺	未指定 建造物	宇津ノ谷地区にあり、かつて宇津ノ谷峠の、峠の地藏堂にあった地藏尊を祀る。地藏尊の鬼退治にちなむ十団子を、道中守護の縁起物として8月の縁日で配る。	静岡市
⑰	あい しゆくう つ の や 間の宿 宇津ノ谷	未指定 史跡	宇津ノ谷峠の東の麓で、峠越えを目指す場所である。集落の中のお羽織屋は、豊臣秀吉に忠義をほめられて羽織を拝領したことにちなむ名である。後に徳川家康も訪れて茶碗を贈り、縁起のよい茶屋として参勤交代の大名なども寄った江戸時代のパワースポット。現在も明治時代の町並みが江戸時代の間宿の風景をしるばせる。	静岡市
⑱	とだんご 十団子	未指定 生活文化	慶龍寺で8月の縁日に配られる厄除けの縁起物で、豆粒大の小さな10個の団子を一連にし、それを9連束ねたもの。宇津ノ谷地区では、これを軒先に吊るす。江戸時代には、峠越えの山道の途中にある茶屋で売られ、街道名物だった。 10個の団子は、旅の僧に姿を変えた地藏尊が、鬼を打ち砕いて10個の粒に変えて退治した伝説に由来する。	静岡市 藤枝市
⑲	とうかいどう う つ の や とうげこえ 東海道宇津ノ谷峠越	国指定 史跡	戦国時代、豊臣秀吉による小田原攻めの際、大軍の通行のために整備されたといわれ、江戸時代の東海道。歴史の道百選に選定されている。浮世絵にも大名行列の通行が描かれ、幹線道路ではあったが、薄暗い険しい山道は、山賊や妖怪が出没する場所とのイメージで、歌舞伎のストーリーなどに登場する。	静岡市 藤枝市

⑳	めいじう つ の やすい どう 明治宇津ノ谷隧道	国登録 有形文化財	明治37年(1904)に開通した、レンガ造りのトンネル。旧岡部宿の有力者たちが発起人となって、明治9年に開通したトンネルが失火で焼失、後に再建されたものである。日本初の有料トンネルといわれ、技術的にも高く、近代化の象徴である。 時代の変遷とともに、明治・大正・昭和・平成と続けて築造されたトンネルが揃い、「トンネル博物館」ともいえる場所である。 三代目歌川広重の浮世絵、東海名所改正道中記では、明治宇津ノ谷隧道を人力車が通る様子が描かれている。	静岡市 藤枝市
㉑	つた ほそみち 蔦の細道	藤枝市指定 史跡	平安時代の古典文学「伊勢物語」で、蔦が茂るさみしい細い道、と記されたことが語源である。宇津ノ谷峠越えの最古のルートとされ、当時の面影を感じる山道が残り、現在はハイキングコースとして散策を楽しむことができる。	静岡市 藤枝市
㉒	さかしたじぞう どう 坂下地藏堂	未指定 建造物	宇津ノ谷峠の西側の登り口、坂下地区にある地藏堂。峠にまつわる地藏信仰や、村人を助ける伝説があり、篤く信仰された。峠東側の宇津ノ谷集落と似た十団子の風習が残り、8月の縁日には団子10個を串に刺してお供えする。	藤枝市
㉓	らけい き ひ 蘿徑記碑	藤枝市指定 古文書	「蘿徑」とは「蔦の道」のこと。宇津ノ谷峠が古典文学にゆかりの深い、風雅な地であることを顕彰する石碑で、江戸時代後期に、建てられた。旧来は峠越えの山道の途中にあった。	藤枝市
㉔	じっこくざかかんのん どう 十石坂観音堂	藤枝市指定 建造物	宇津ノ谷峠を下り、岡部宿までの街道沿いにある観音堂。近くに古典文学「西行物語」に登場する「笠懸の松」があり、これにちなんだ西行山最林寺は、江戸時代には古典ゆかりの地として知られ、旅人が訪れた。江戸時代後期の火災でこのお堂だけが残り、江戸時代の様子を伝えている。	藤枝市
㉕	おかべしゆくおおはたごかしばや 岡部宿大旅籠柏屋	国登録 有形文化財	21番目の宿、岡部宿の旅籠で、宿場の中でも大規模な旅籠。天保7年(1836)の建物で、旅人が宿泊する様子を体感できるほか資料館として江戸時代の旅にかかわる資料を見ることができる。東海道中膝栗毛の弥次喜多は、宿屋の客引きから、大井川が増水で渡れない「川留め」により、先々の宿場が混雑していると聞かされ、岡部宿に宿泊する。	藤枝市

②⑥	おかべしゆくほんじんあと <b>岡部 宿 本陣址</b>	<b>藤枝市指定</b> <b>史跡</b>	岡部宿の本陣跡で、代々内野家が務めた。明治時代以降も敷地は受け継がれ、現在は史跡公園として、門・塀の再現や屋敷の間取りを平面表示し、江戸時代の本陣屋敷や街道の佇まいを感じることができる。	藤枝市
②⑦	とうかいどうまつなみき <b>東海道松並木</b> (内谷地区)	<b>藤枝市指定</b> <b>史跡</b>	岡部宿を西へ出て、藤枝宿へと向かう街道沿いの松並木(約560m)。江戸時代以降も、松を植えて街道の景観を守り伝えた。岡部宿と藤枝宿の間の東海道にはところどころに松が残されている。広重の隸書東海道では、東海道の松越しに望む田中城の本丸櫓が描かれている。	藤枝市
②⑧	<b>田中城</b> <b>田中城本丸櫓</b> <small>たなかじょうしもやしき</small> (史跡田中城 下屋敷)	<b>藤枝市指定</b> <b>史跡</b> <b>藤枝市指定</b> <b>建造物</b>	田中城は、駿河西部の志太平野の中央にあり、戦国時代から明治時代まで約500年、この地域を治める中心地であった。同心円形の特徴的な縄張で、守りが固い城として知られ、徳川家康とのゆかりも深い。江戸時代には、藤枝宿場町は城と直結して城下町も兼ねた。広重の隸書東海道で描かれた本丸櫓など、田中城にゆかりある江戸時代の建造物を、移築された田中城下屋敷で見ることができる。	藤枝市
②⑨	<small>だいけいじ</small> <b>大慶寺</b> <small>くおん まつ</small> <b>久遠の松</b>	<b>未指定</b> <b>建造物</b> <b>県指定</b> <b>天然記念物</b>	大慶寺は藤枝宿の本陣近く、宿場町の中心にあり、田中城の祈願寺として信仰を集めた名刹で、大名行列の宿泊など混雑する時には宿泊場所にもなった。鎌倉時代、京都奈良での修行を終えた日蓮上人が旅の途中で立ち寄ったことが寺の起源と伝える。お手植えの「久遠の松」は樹齢750年と推定される巨木、江戸時代にも目印となって旅人を導いた。	藤枝市
③⑩	<small>あくなみじんじやたいさい</small> <b>飽波神社大祭の</b> <small>ほうのう お ど</small> <b>奉納踊り</b>	<b>藤枝市指定</b> <b>無形民俗</b>	江戸時代の藤枝宿場町の祭礼にルーツがあり、明治時代以降、現在の形式が定着した。3年に一度の祭りで、藤枝宿内を中心に14地区の屋台の勇壮な曳き回しと、長唄に合わせて大勢の踊り手が華やかな地踊りを繰り広げる。江戸風の粋な風情のなごりを伝え、地域を挙げての賑わいとなる。東海道が運んだ貴重な江戸の文化を藤枝宿で体感できる。	藤枝市

③①	せと そめい 瀬戸の染飯	未指定 民俗 (生活文 化)	藤枝宿と島田宿の中間、瀬戸の立場で売られていた街道名物で、戦国時代から登場する。蒸した糯米を梶子で黄色く染めて干したもの。梶子は漢方薬で足腰が強くなるといい、旅人に評判だったという。 弥次喜多はこの立場で、ご馳走になるつもりで豪勢に飲食するが、だまされて全部支払うことになる。 「千貫堤染飯伝承館」では染飯や東海道の歴史を紹介、イベントでは復元した染飯を味わうことができる。	藤枝市
③②	とうかいどうまつなみき 東海道松並木 (上青島地区)	藤枝市指定 史跡	瀬戸の立場を過ぎ、島田宿へと向かう街道沿いの松並木(約150m)。江戸時代以降も、松を植えて街道の景観を守り伝えた。	藤枝市